



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	移動的な社会としての占領期日本に関する観光学的考察 [全文の要約]
Author(s)	遠藤, 理一
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第14222号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79891
Type	doctoral thesis
File Information	Riichi_Endo_summary.pdf



移動的な社会としての占領期日本に関する観光学的考察

2020 年度

(令和 2 年度)

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院

博士学位論文

【要約】

遠藤理一

1 目次

序章

はじめに

1 先行研究の批判的検討

- 1.1 占領期研究と「草の根の占領改革」論
- 1.2 「草の根の占領改革」論の問題の所在
- 1.3 近年の占領期研究の動向——移動と接触への着目
- 1.4 占領期日本の観光についての先行研究の批判的検討

2 本研究の理論的視座

- 2.1 占領期の日本社会をめぐる移動論的転回
- 2.2 資本主義国家における観光業の役割
- 2.3 観光の場における演出と観光実践
- 2.4 観光経験を通じた自文化・自己および異文化・他者認識の変容

3 本研究の研究課題

4 本研究の構成

5 調査事例と利用した施設について

6 調査事例の背景

- 6.1 占領改革についての概説
- 6.2 連合軍・米軍の動静についての概説
- 6.3 都市の占領についての概説

第1部 占領改革における観光業の役割と人々の観光実践

第1章 米軍における将兵向け観光事業の展開

1.1 2つの世界大戦と米軍における余暇事業の発展

- 1.1.1 第一次世界大戦時における米軍の余暇事業
- 1.1.2 第二次世界大戦時における米軍の余暇事業

1.2 占領期日本における米軍の余暇事業の展開

- 1.2.1 占領期日本における米軍の余暇事業の展開
- 1.2.2 スペシャル・サービス・ホテルの展開

1.3 米軍による観光事業の展開

- 1.3.1 第二次大戦後ヨーロッパにおける米軍の観光事業

1.3.2 占領期日本における米軍の観光事業

1.4 観光客としての将兵たちの表象——米国向け PR と観光事業の役割

1.4.1 第二次世界大戦後の米軍における PR 事業

1.4.2 PR における占領期日本を観光する将兵たち

第 1 章のまとめ

第 2 章 日本政府・企業による将兵向け観光事業の展開

2.1 進駐をめぐるメディアと観光事業の役割

2.1.1 敗戦直後における「米軍」をめぐる表象

2.1.2 進駐をめぐるメディアの表象実践

2.1.3 「平和進駐」における土産物の役割

2.1.4 日米協働の国体護持と将兵向け観光事業の役割——京都市を事例として

2.2 日本の観光業者による将兵向け観光事業と性的慰安事業の展開

2.2.1 日本の観光業者による将兵向け観光事業の展開

2.2.2 観光事業と性的慰安事業のつながり

第 2 章のまとめ

第 3 章 占領期初期における日米の観光事業

3.1 GHQ 民間情報教育局による文化資源の再編

3.1.1 GHQ 民間情報教育局による記念物をめぐる改革

3.1.2 GHQ 民間情報教育局による文化財と国立公園をめぐる改革

3.2 占領期初期における日本の観光事業の展開

3.2.1 戦前・戦中の日本の観光事業

3.2.2 敗戦直後の観光事業の立て直し

3.2.3 日本の戦後復興と「観光立国論」

3.2.4 観光事業の国家政策への展開

第 3 章のまとめ

第 4 章 GHQ の経済復興政策と日米の国際観光事業

4.1 戦時中および第二次大戦後直後における米国の観光業

4.1.1 戦時中および第二次大戦後直後における米国の観光業

4.1.2 アメリカン・ヘゲモニーの拡大と米国の国際観光事業

4.2 GHQ 経済科学局による国際観光事業

4.2.1 占領政策の転換と国際観光事業の展開

4.2.2 経済科学局観光サービス部による観光事業

4.2.3 経済科学局観光宣伝・施設部による観光事業

4.2.4 国際観光事業をめぐる問題

4.3 観光業による復興の演出と人々の観光実践

4.3.1 国際観光客向けツアーにおける「復興」の演出と人々の観光実践

4.3.2 「アメリカ」に評価された街——占領期京都市の観光事業と言説戦略

4.3.3 平和と戦争のせめぎ合う街——占領期広島市の観光事業と観光経験

第4章のまとめ

第5章 朝鮮戦争と日米の観光事業

5.1 朝鮮戦争と帰休事業の概要

5.2 帰休事業のシステムと余暇事業の展開

5.3 帰休事業における観光事業と観光実践

5.4 「平和」な日本の旅行文化——新日本観光地百選

第5章のまとめ

第2部 日米の人々の観光実践と観光経験

第6章 連合軍将兵たちの観光実践と観光経験

6.1 米国・米軍における日本観光をめぐる表象と物語

6.1.1 戦前・戦時中の米国における観光旅行

6.1.2 戦前・戦時中の米国における日本表象

6.1.3 米軍将兵向けの日本表象における観光地イメージ

6.1.4 第二次大戦後米軍の国際協調路線と将兵に求められるふるまい

6.2 連合軍将兵たちの日常的実践と経験

6.2.1 焼け跡と将兵たちの受動的経験

6.2.2 「リトル・アメリカ」の構築と揺らぎ

6.3 連合軍将兵たちの観光実践と観光体験

6.3.1 空襲と真正な「日本文化」の発見

6.3.2 形骸化する「異文化交流」とジェンダー化された「出会い」

6.3.3 土産物の収集と故郷とのつながり

6.4 連合軍将兵たちの観光経験と自他認識の変容

6.4.1 日本の人々との日常的な接触

6.4.2 占領改革を疑い始める将兵たち

第6章のまとめ

第7章 日本の人々の観光実践と観光経験

7.1 敗戦直後の日本の人々の日常

7.1.1 戦前・戦時中における日本の人々の観光旅行

7.1.2 1945-47年における観光旅行の困難さ

7.1.3 神社離れとGHQの権力性

7.2 敗戦直後の日本の人々による観光実践と観光経験

7.2.1 闇市とはとバス——敗戦直後の日本を散歩する人々

7.2.2 演出される「リトル・アメリカ」と野次馬たち

7.2.3 追認される2つの「アメリカ」——「民主主義の使者」と「敵兵」

7.2.4 将兵たちとの接触をめぐる実践と経験

7.3 朝鮮戦争期の日本の人々の観光をめぐる実践と経験

7.3.1 問題化される「基地の町」

7.3.2 「ツーリスト・ソルジャー」の終わり

7.3.3 日本の人々の観光実践における「平和」と「独立」

第7章のまとめ

終章 結論

1 観光の場における管理・上演と観光実践のせめぎ合い

1.1 観光業を通じた場所と人々の身体・想像力の管理

1.2 占領改革をめぐる観光実践

2 占領期日本社会における観光経験の社会的意義

3 本研究の意義と課題

参考文献

謝辞

2 本論文の概要

占領期日本は GHQ による占領改革が行われた時期だったのか、あるいは日本の人々が民主主義、平和主義的な社会を構想した時期だったのか。本研究では観光の事例と理論を通じて、この時期を連合軍将兵たちや国際観光客、日本の人々の移動と接触が大規模に生じた時期として捉えることで、日米の人々のそれぞれの自他イメージやアイデンティティを問い直すきっかけが生まれた時期としてのあり様を浮かび上がらせることを試みた。

世界的に見て稀有なほど理想的な平和主義、民主主義社会が構想され、構築されようとした占領期日本に関して、占領改革について、または日本の人々がそうした自ら占領改革を構想し実践した側面（「草の根の占領改革」）についての議論が重ねられてきた。ただし当時の人々の実践の社会的意義についての議論をさらに進めるには、日本の人々について議論するという前提、また人々の実践が占領改革やその理念である民主主義や平和主義と適合的であるかどうかについて議論するという前提を保留し、連合軍将兵たちも含む多様な主体のコミュニケーション過程について探り、占領改革がいかに相互交渉されていたのか、あるいは必ずしもそれとは関わらない相互交渉がいかに生まれていたのかを浮かび上がらせる必要があるのではないだろうか。

本研究では、未だ多くのことが明らかになっていない占領期および朝鮮戦争期の日本における観光事業と観光旅行の動向を明らかにしたいと考えた。取り上げた主な事例は、①連合軍将兵たちに対する余暇・観光事業として、米軍（とくに第8軍スペシャル・サービス局や米赤十字社）、日本政府、地方政府（とくに京都市）、日本の観光業者によるもの、②占領期日本における観光に関する計画・開発・観光あつ旋事業や宣伝事業について、とくに GHQ 民間情報教育局や経済科学局観光サービス部、日本政府、地方政府（とくに京都市と広島市）、日本交通公社やパン・アメリカン航空など日米の観光業者によるもの、③朝鮮戦争期における国連軍・米軍将兵たちの朝鮮半島から日本への帰休制度について、④連合軍将兵たちに関して、彼らの日本イメージ、日本での日常や観光旅行について、日本の人々との接触について、国際観光客の日本ツアーについて、⑤日本の人々に関して、彼らの敗戦直後の日常や観光旅行、連合軍将兵たちとの接触について、朝鮮戦争期の観光旅行について、また帰休制度に対する反対運動などに関するものである。

こうした事例の分析を通じて本研究は、「移動的な社会としての占領期日本」のダイナミズムを浮かび上がらせることを目指した。とくに観光の理論を立ち上げることで注目したいのは、「観光業」と「根無し草的つながり」とのせめぎ合いである。大規模な移動と接触

が生じる社会において、観光業は人々の身体や想像力、また場所の物理的状況や象徴的意味に働きかけることで、移動的な社会を管理しようとする。一方で人々は観光実践を通じて、演出された場所の意味に疑いのまなざしを向けたり、観光業が指定する物理的・意味論的範囲にとどまらない移動を行い、場所をめぐる新しい意味を生み出す。また人々は他者との接触から生じる観光経験によって、場所や自己・他者のイメージやアイデンティティの偶然性に気づかされる。とすれば占領期日本において、観光業は占領改革やその理念である平和主義・民主主義をどのように演出し、人々にどのような演技を求めたのか。また人々は移動と接触のなかで、どのように占領改革の過程と関わり、あるいは必ずしもそれとは関わらない実践と経験をしていたのか。

本研究はこうした観点から占領期日本における観光事業と観光旅行について分析しつつ、とくに人々の観光実践と観光経験の性格として定義される「根無し草的つながり」がいかに占領期日本においてみられたのかを取り上げることから、占領期日本における人々の実践と経験の社会的意義について考察した。

3 各章の要約

序章では本研究の問題意識、目的、理論的視座、構成について説明し、占領期日本についての基礎的情報（占領改革について、連合軍・米軍の動静について、都市の占領について）をまとめている。

第1部（第1章～第5章）は日米の観光業による観光事業を中心に論じた。

第1章では米軍による米軍将兵向けの余暇・観光事業について論じた。この章の目的は、第一に、占領期日本でこの事業がどのように行われていたのかを把握すること、第二に、米軍がなぜこの事業を行っていたのかを明らかにすることである。第一の点を明らかにするため、米軍の中にあるスペシャル・サービス局という部局やアメリカ赤十字社などが行ったレクリエーション事業、休養用のホテルの運営、ツアー事業などについて論じた。また第二の点について、占領期日本における余暇事業の目的について言及された資料を取り上げるとともに、第一次大戦時と第二次大戦時の米軍の余暇事業について、また米軍がアメリカ本国に向けて発した、占領地での余暇・観光事業に関する情報も踏まえて論じた。そして米軍の余暇・観光事業は、性病や飲酒を防ぎ、教養を身に付けさせることで米国と米軍にとって都合の良い将兵たちの身体と想像力を作り上げるとともに、戦後もアメリカが軍を保持し続けることを正当化する役割も担わされていたことを指摘した。

第2章では、日本側が行った連合軍将兵向けの余暇および観光事業を論じた。この章では第一に、なぜ日本政府・地方政府や企業が米軍向けの観光事業を行ったのか、第二に、日本側と米軍側の観光事業の協力関係について探ることを目的とし、そのためにまず、連合軍が進駐した直後からの日本政府、地方政府（とくに京都市を事例とした）、日本交通公社やバス業者、百貨店、伝統工芸の工房や小規模な土産物業者などによる将兵向けの事業を取り上げた。さらにこれらの事業の意図を浮かび上がらせるために、敗戦直後の新聞報道を取り上げ、敗戦の直後から、連合軍の進駐に際して何が問題とされていたのかを探った。そしてこれらの余暇・観光事業には、将兵たちを安全に進駐させること、特に略奪事件を防ぐこと、また京都市による観光事業の事例から、日本が戦争で負けても誇りを保っている姿を見せることといった目的があったこと、また米軍が性病予防のために余暇・観光事業を行っていたのに対し、日本側は性的慰安事業を行っていたこと、ただし米軍との暗黙的な共犯関係、観光事業との共犯関係がみられたことを指摘した。

第3章では、連合軍将兵向けに関わらない敗戦直後の日米の観光事業について論じた。第一に GHQ による記念物や文化財・国立公園にかかわる事業を取り上げ、それが平和主義・民主主義国家にふさわしい「日本文化」を再編させるという意味合いをもった事業であったことを指摘した。第二に敗戦直後から日本政府や日本交通公社がどのように観光事業を計画し実際に行ってきたのかを論じた。第三に彼らが提唱した「観光立国」という言葉にどのような期待が込められていたのかを論じ、これが国策として取り上げられていく過程を論じた。この時期、観光業者は「平和国家」にふさわしい事業として観光事業の重要性を説いており、国会が再編されたことをきっかけに、観光事業が重要なものとして取り上げられるようになっていたことがわかった。

第4章では GHQ が経済復興政策を始めてからの日米の観光事業について論じた。第一にこの時期に GHQ や日本の観光業者による観光事業が展開していく過程を論じるため、とくに GHQ 経済科学局の観光サービス部という部局の役割を詳述した。第二に 1947 年末より始められた国際観光客向けのツアーについて、運営システムやツアーの内容について取り上げ、日本の観光業者が国際観光客に何を見せようとしていたのかを探った。第三に京都市と広島市に着目し、地方でどのように観光事業が進められていたのかを論じた。この章での議論をまとめると、第一に、ヨーロッパでのマーシャルプランのようなかたちで、GHQ は日本での観光事業を活性化させようとしていた。ただし 1949 年頃以降、米軍がホテルを接収していることや朝鮮戦争などの影響から、観光事業は下火になった。第二に、日本の観光

業者は国際観光客向けのツアーを通じて、復興した平和的・民主主義的な日本を見せようし、そのために焼け跡や闇市といった戦後日本にふさわしくない要素を見せないようにするなどの工夫を行っていたことがわかった。ただし国際観光客はむしろ日本の戦争を彷彿とさせる要素を見ようとしており、また米国のジャーナリストは日本側の意図を無視して報道を行っていた。

第5章では朝鮮戦争期にあたる1950-53年における日米の観光事業について論じた。第一に米軍による米軍や国連軍の将兵向けの帰休制度がどのように展開したのかを論じた。そして観光が戦闘員としての米軍将兵を再生産する役割を果たしていたこと、日本の観光地が余暇・観光サービスというかたちで戦争に組み込まれていたことを指摘した。第二にこの時期からはじめられた日本の人々向けの観光事業の内容を取り上げつつ、それが当時の社会においてどのような意味を持っていたのかを考察した。特に新日本観光地百選というキャンペーンを取り上げ、これが日本の人々にとって、戦争から切り離された平和な日本を味わう機会になっていた可能性を指摘した。

第2部（第6章～第7章）は日米の人々の観光実践と観光経験を中心に論じた。

第6章では連合軍将兵たちの観光実践と観光経験について論じた。第一の論点は、彼らがなぜ、どのように観光旅行をしていたのかということである。まず米国ないしは欧米における日本表象、および第二次大戦時の米軍のハンドブックにおける日本表象についてレビューした。また彼らの占領期日本での日常生活がどのようなものだったのかを探り、そのうえで彼らの旅行動機や観光実践を探った。これらの調査分析を通じて、彼らの旅行動機には、焼け跡が広がり、日本の人々が往来している都市を離れて、観光地、とくに京都や奈良など、空襲被害が少なく伝統的な日本を見せてくれる場所に行きたかったといったものがあつたことがわかった。また米軍が日本の人々とのコミュニケーションを促していた一方で、彼らの多くは日本人との接触を避けており、ただし観光地のように一定の安全や質が確保されたうえで、特に男性将兵と日本人女性という関係での接触は歓迎されていた。

第二の論点が彼らの観光経験の性格についてであり、まず観光旅行の際にというよりも、連合軍将兵たちは日本での生活の中で日常的に日本の人々と偶然的に接触し、それが彼らの自他イメージを変容させる機会になっていたことがわかった。ここでは例えば満員電車に乗り合わせたある将兵が、日本の人々は生活環境が良くないために後進的であるように見えてしまうことに気づいたり、日本の人々を近い距離から観察したあるジャーナリストが、連合軍将兵たちが日本の人々を下に見ているように、日本の人々もまた連合軍将兵たち

が特権を持ちながら民主主義を掲げているという矛盾を見抜いているだろうと考えるようになった事例などを取り上げた。

第7章では日本の人々の観光実践と観光経験について論じた。第一に日本の人々はなぜ、どのように観光旅行を行っていたのかを探った。そして敗戦直後に日本の人々は神社や聖跡に行かなくなっていたこと、むしろ闇市や神社や公園での祭りといった場所を散策するような気安い娯楽に向かっており、そこには占領中心地である銀座のような場所も含まれていたことを指摘した。ただし1950年ごろになると靖国神社への参拝も盛んになりはじめ、また文学散歩という日本の近代文学作家ゆかりの地をめぐる散歩が行われ始めるなど、日本の人々のナショナルなアイデンティティを体験したり作り上げるような形態の観光が見られ始めた。

第二に日本の人々にとっての観光経験はどのようなものだったのかを論じた。日本の人々にとっても連合軍将兵との接触は頻繁にあり、そこでかつての敵国に対してでも、民主主義の使者に対してでもない他者との友情や恋愛といえる関係が形成されていたことを取り上げた。ただし多くの日本の人々は、むしろ将兵たちの規律がなっていないといったように、戦時中からのまなざしでとらえたり、あるいは逆に将兵たちは先進的であると絶賛する場合が多くみられたこと、それらがどちらにせよ連合軍将兵達との心理的な壁を有む接触であり、同時に生まれていたのが自身の劣等感や他の日本の人々への反感だったという側面も取り上げた。また朝鮮戦争期における、奈良市にある米軍の余暇施設への反対の声などを取り上げ、これを日本の人々が戦争を想起させる要素との接触を忌避することで、米軍将兵たちとのさらなる心理的な壁を生んだ現象として解釈した。

終章では観光の事例と理論から捉えられる「移動的な社会としての占領期日本」のダイナミズムについて要約したうえで、占領期日本における人々の実践と経験の社会的意義について考察した。第一に観光業がどのように場所や人々の身体と想像力を管理しようとしたのかを検討し、占領期日本において日米の観光業は、観光開発や宣伝、人々への教育を行うことによって、「民主主義」「平和主義」的に見える場所や人々を演出しようとしていたこと、ただし、観光業が行う演出は、必ずしも民主主義・平和主義国家を実現することとイコールではなく、演出が優先される状況は、占領改革が形骸化していた状況でもあったという側面を指摘した。第二に占領期日本において、観光の場において占領改革が多様な主体によってどのように実践されたのかについて検討し、観光業は占領期日本における「民主主義」「平和主義」を演出した一方、人々はこうした「演出された占領改革」の筋書きを追認しておら

ず、必ずしも「草の根の占領改革」を行わなかったばかりか、演出された場所や人々の意味に疑いのまなざしを向けてもいたことを浮かび上がらせた。第三に占領期日本における場所や人々との接触は、人々にどのような観光経験を与えたのかという点について検討した。そして連合軍将兵たちにとって観光経験は占領改革につながるというよりも、占領改革が依っている理念や方法を問い直すきっかけを与えていたことを論じた。ただし一方で多くの日本の人々は将兵たちとの接触を通じて劣等感を感じていたのであり、日米の人々の接触に、場所や移動をめぐる非対称的な関係性が作用していた側面があったことを指摘した。

第四に「移動的な社会としての占領期日本」における人々の実践と経験の社会的意義について考察した。日米の人々の観光実践は、場所や人々に関して占領改革とは異なる意味を生み出していた。観光経験は占領改革の自文化中心主義という欠点を補うように、占領改革やその理念を他者のまなざしを通じて問い直しつつ、日米の人々に共通の生活基盤があることに気がつく経験をもたらししていた。つまり日米の人々の観光実践と観光経験を通じて、信念やイメージ、アイデンティティの偶然性が浮かび上がる「根無し草的つながり」が形成されていたのであり、本研究はここに占領期日本社会における日米の人々の実践と経験の社会的意義があったと結論づけた。